

贈り物

阿羅本 景

琥珀は夜遅く、一人で入浴する。

所は信州の山里にある、とある農村の離れにある風呂場であった。木の風呂桶に張られたお湯の中で琥珀は身体の力を抜いて伸びの動きをしていた。きめ細やかな琥珀の肌の上を、お湯はさらさらと流れていく。

風呂場の明かりは小さな電灯が一個灯るだけであった。外は明かり一つなく真っ暗で、虫の鳴き声だけがあるものは遠く、ある物は近く聞こえる。物慣れぬ者であればこの闇の中に何がいるのかを恐れかねないほどの黒さであったが——琥珀は闇に動じなかった。

彼女が知っている人の心の闇に比べれば、この山里の闇は無害な闇に思える。

ざばり、と水音を立てて琥珀は立ち上がる。

琥珀は風呂桶から上がると、櫓の腰掛けに腰を下ろして石鹸を手取る。弱い明かりの中で琥珀の白い裸身だけがぼろ、と浮き上がっていた。だが、その姿を見る者はなく、一人琥珀は風呂場の中で黙って身体を洗い始める。

石鹸を泡立て、垢擦りに泡を盛って腕から肌を流し始める。日々の汗と埃を洗い流すように、琥珀は念入りに身体を拭う。琥珀のすべやかな肌は石鹸の泡に滑り、その肌に白い跡を残していく。

琥珀は腕から足の先、太股へと洗い進める。木の棒の渡された窓から僅かに流れ込む風が、琥珀の風呂で火照った身体に涼しく感じる。琥珀は垢擦りで洗う手を、

自分の胸に触れる。

琥珀のふくよかな胸が、その手によって洗われるたびに姿を柔らかく変えていく。自分でこうやって触るときには何も感じないし、かつてこの胸がまだ育ちきらない頃に荒々しく揉みしだいていた男達の手荒らされたときも、何も感じはしなかった。

だが、自分を愛してくれる志貴の指に触れたときだけは不思議と——快感を憶える。自らの身体の苦しみを欺瞞するための偽りの感覚とは異なる感覚に、琥珀は弱かった。志貴が唇を肌に寄せ、その手で琥珀の身体を触れるたびに、琥珀はまるで処女のように震えるのであった。

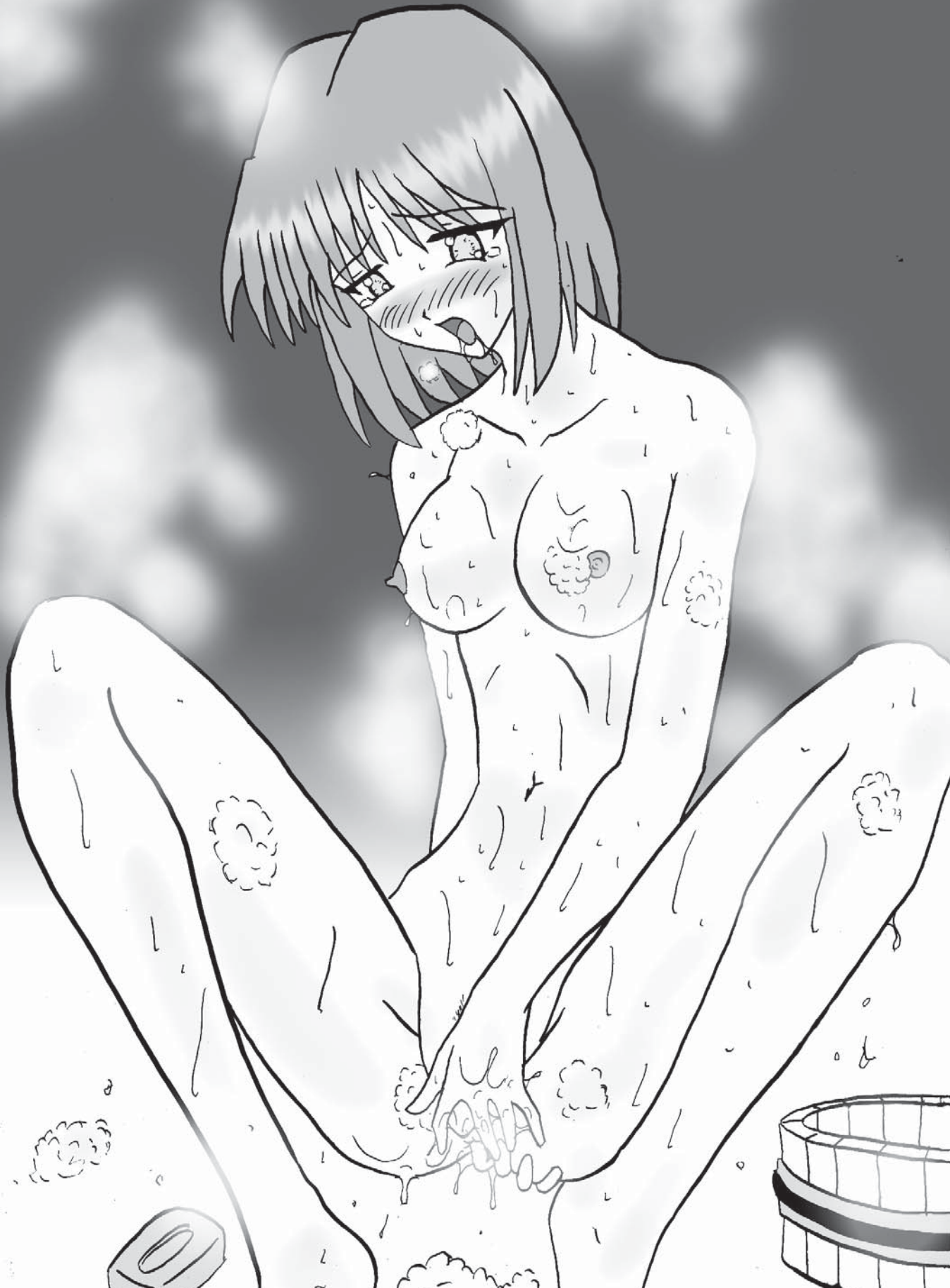
琥珀は胸から手を離し、背中を器用に洗い流す。全身がほとんど石鹸の泡に包まれている中で、琥珀の手は残された女性の秘部に進む。

石鹸の泡を指に取り、琥珀はその入り組んだ髪を洗う。指が口を閉ざした小陰唇の髪に触れ、その中身をくすぐるように触れると、ん、と琥珀は喉の底でかすかに声を漏らした。

八歳の誕生日の夜から、何度男性を受け入れてきたのだから琥珀は憶えていなかった。いや、それは琥珀という名の別の人間に加えられた陵辱であり、それを琥珀はなんとも思わなくなること、一時は習得していた。

普通ならば多重人格などの障害を引き起こしかねない心理的な傷があったにも関わらず、琥珀の意識は頑強であった。

だが、共感者としての志貴との交わり——あの性交が、琥珀を変えてしまった。初めて愛されて身体を貰われたときに、琥珀はそれ以前の琥珀では無くなっていた。共感者として初めて志貴の存在を受け入れた……今までの積久や四季とは、



まったく次元が違う体験であった。

「志貴さま……」

琥珀が風呂場の中で、ちいさく呟く。

天井から垂れた水滴が、風呂桶の中でぼちゃん、と鳴った。

琥珀の指は秘部の襞を物惜しげに触れていたが、やがて泡にまみれた女性の花園から指を外し、その奥にある小さな窄みに近づいていった。

琥珀の指が——アナルの皺の中心を触れる。

「……ふう……」

琥珀は、その部分には本当の意味での性感を感じる触覚がないことをもちろん知っていた。そこは排泄器官であり、こうやって指を触れることもあまりない器官であると言うことを。

だが……ここだけが、琥珀に残された純潔であった。

琥珀の指は、前から後ろから両手でアナルを念入りに洗っていく。最初の内は汚れを取るのが目的であったが、次第にその硬い蕾の周りを念入りに触る。

石鹸に濡れた指が、凹んだ琥珀のアナルの周りを揉み始めた。

「うん……ん……は……」

爪で柔らかい肛門の周りの肌を傷つけないように、指の腹で琥珀は慎重にアナルをマッサージしている。お腹の底に息むように力を入れると、僅かに膨らむ肛門をゆっくりと、丹念に揉みほぐすかのように。

琥珀は石鹸に潤った人差し指を、アナルの真ん中に当てる。

「……は……う……」

琥珀の細い指が、身体の一歩奥の部分に飲み込まれていく。指先から第一関節、第二関節までと入っていく間に、琥珀は風呂場の床にしゃがみながらアナルを広げられる感覚に耐えていた。

潤滑剤の助けもあって、肛門に滑り込んだ琥珀の指。琥珀の指にはまるでゴムの太い輪が絡みつくような収縮感を感じ、逆に指を入れられている肛門にはその口を閉まりきれずに何かを差し込まれている違和感を覚える。

最初の頃はものを入れる場所では無かったためにとにかく痛かったのであるが、毎日のようにこうやってお風呂場でお尻を触っているだけあって、今では琥珀はまるで背筋をくすぐられるような、アナルの感覚を覚え始めていた。

指を差し込み、しゃがんだあられもない格好のまま琥珀は、アナルの中に差し込んだ指を動かし始める。内側からぐねぐねと、指を周りから締め付ける肛門の筋肉を揉みほぐし続ける。

「あ……ふう……は……」

琥珀の肛門の中で指が動いたたびに、誰もいない風呂場の中で琥珀の声が流れる。丹念に自分の肛門をマッサージする琥珀は、ぐ、と緩み掛けたお尻の穴の中に、指を根本まで差し込む。

「はっ……いや……志貴さま……」

琥珀の口から志貴の一言が漏れた瞬間に、琥珀の泡に包まれた身体が震える。その間も、琥珀の指はアナルを刺激し続けていた。

自分のお腹の中に指を差し込み、揉みほぐす——奇妙な感覚であり、琥珀はその行動に快感を覚え始めていた。そう、こうやって少しずつ身体に快感を覚え込ませていけば、きっと志貴さまに——そう思って琥珀は、繰り返しこうやってアナルを揉みほぐしていたのであった。

「志貴……さま……」

琥珀は手首を捻るようにして指を回しながら、讒言のように志貴の名前を口にする。柔らかなっていくアナル、琥珀の脊髄に快感の波を送り続ける。

何分も、琥珀はそうやってアナルを責め続けていた。湯上がりの身体は冷え始めていたが、自分の中に差し込んだ指の動きによって身体は酔わされ続けていた。クリトリスの鋭敏な快感とも、膣の内側から広がるような快感とも違う、アナルの甘く長い快感が琥珀の身体を染め上げると……

「志貴さま……お尻で、お尻で……いつちゃう……」

琥珀はそう小声で息も絶え絶えに口走りながら、ぐ、と指を動かす。体の中で曲がった指が、琥珀の中をかき回しながら――

「やつ、はあっ、やあ……あ……」

琥珀の身体がぐんと震えたかと思うと、そのまま風呂場の床に崩れ落ち、琥珀は身体を簧の子の上に横たえる。

ぎゅっと指を締め付ける肛門から、琥珀はそろそろと指を抜く。指を吐き出した琥珀のお尻の穴は、またきゅっと窄まり菊の様な皺を寄せる。

よろりとゆっくり身体を起こした琥珀は、先ほどまで自分の中に埋もれていた指先をそっと眺める。お尻の穴のむず痒いような感覚はまだ残っていたが、こようやくお尻で上り詰めるのはえもいわれぬ感覚がある。

琥珀はぼーっと指を見つめていたが――くしゅんと可愛らしくくしゅみやみをしてから気がつく。自分に身体はまだ石鹸の泡を残したままで、夢中になってお尻を責めていたために身体が冷え始めてるといふことを。

「はあ、まだ、身体洗っている途中でしたね……」

琥珀は軽く頭を振ると手桶を取って、まだ熱いお風呂のお湯を汲んで身体を洗い始める。お湯で流されてしまったが、お尻の穴を可愛がっていることで、自分の前の方の女陰が快感で湿っていたことを琥珀は気がついていていた。

琥珀は身体を流し終えると、ゆっくりと風呂桶を跨いで身体を浸していく。じっと温かいお湯の中に身を沈めながら、琥珀は愛しい人の顔を思い浮かべながらそっと笑った。

「志貴さま……待っていてくださいいね……」

§

「ふう……」

§

遠野家のやたらに立派なお手洗いの中で、琥珀は着物の裾を直して立ち上がった。風呂上がりの身体でトイレにはいると、琥珀は予め用意であったイチジク浣腸を注入し、中身が空っぽになるまで排泄をしていたのだった。

自分で浣腸をする、という行為は琥珀は初めてであった。だが、誰か他の人に頼むわけにも行かないので、一人で便座に座り、おすおすとそのアナルにピンク色の容器を差し込んだのであった。

お腹を硬い物が走るような浣腸の排泄の感覚は、あまり気持ちのいい物ではなかった。世間ではこういう事が病みつきになる向きもいると琥珀は知っていたが、まだ自分はその領域には遠いと琥珀には思えたのだった。

普段はこんな事をするとは思っても寄らないことだったが、今日だけは――必要だった。

二階にあるトイレのウォシュレットで念入りに洗浄し、琥珀は湯上がりの身体

を一重の襦袢に包んでいた。こうしてトイレで用意するのは、部屋で琥珀のことを待つ志貴のためにであった。

琥珀はぼんぼんとお腹をさすると履き物を直し、廊下を見渡してから歩き始める。週末で自分が帰っているとはいえ、この屋敷では他の人間に偶然遭遇することは滅多になかったのであるが……琥珀と秋葉の隔意が残る以上、志貴の部屋に向かう姿を琥珀は見られたくはなかった。

——まあ、見られても秋葉さまならそんなに困らないんですけどもね

琥珀は心中でそう呟くと、静かな足取りで志貴の部屋に向かう。そして志貴の部屋の扉の前に立ちと、こつこつとドアをノックする。

「失礼します、志貴さま……」

「……琥珀さん？入って……」

その声を聞くと、琥珀はドアを開いて身体をすつと部屋に入れる。

ベッドサイドのライトだけを灯して、志貴が身体を起こしているのが琥珀の目に入った。琥珀と同じように風呂上がりの寝間着姿の志貴は、相も変わらず素っ気ない部屋の中で慌てたようにスリッパを引っかけて立ち上がった。

その姿を見て、琥珀はくすりと笑う。後ろ手にドアを閉め、念のために錠を下ろすと琥珀は志貴の元に歩み寄る。

志貴はそんな琥珀に手を伸ばすか様に見えたが、その寸前で手を止めて両手を握り合わせ、恥ずかしそうに目をそらす。琥珀は志貴の手をほんのり笑って取る。と、寝台に誘った。

「琥珀さん、その……いつも……」

志貴は話を切り出そうとして言い淀み、頭を掻いて困ったような表情で琥珀のことを見つめていた。

秋葉からの熱量を奪わない為に、志貴は琥珀との共感者の交わりを結んでいた。ただ、死体すらも生き返って野山を駆け出す生粋の純血の巫浄家の持つ強力な共感ならまだしも、分家筋である琥珀には何もしなければほとんど死体も同然の志貴を救うためには、定期的に志貴と交わり、共感者の力を分け合う事が必要であった。

その為に琥珀は週末は遠野家に戻っているのだった。その度に志貴は琥珀を抱くのだが、見方によれば琥珀から命を吸い取る浅ましいセックスをする様に見える——その為に志貴の心は僅かながら疚しさを憶えていた。

それは秋葉への遠慮故なのか、あるいはいつも共に暮らしている翡翠への申し訳なきなのははっきりしない。ただ、その度に志貴は琥珀に愛の言葉を囁こうとして、美辞麗句のレパトリーの少ない志貴はその度に苦慮するのであった。

殺した殺された切った張ったに掛けては饒舌な志貴も、愛しい琥珀の前ではあまり器用な恋人ではなかった。琥珀もそんな志貴のことを良く知っている。

志貴の負担を軽くするためにも、いつもは琥珀が志貴をリードする形で始まっていた。琥珀は手を引いて志貴を寝台に乗せ、自分も腰を下ろす。

「志貴さま……」

「琥珀さん……」

琥珀の顔が志貴に寄り、軽く唇を合わせる。このまま志貴が琥珀を抱き寄せて性交は始まるのであるが、今夜はそれとは少し違った。

琥珀は唇を志貴から話すと、ベッドの上にはちよこんと正座する。自分から僅かに距離を置いた琥珀に志貴は不思議そうな目を向ける。

どうしたの？琥珀さん——という志貴の無言の問いを知ってか、琥珀は居住まいを正して膝前に指を付く。志貴もそれに合わせてベッドの上に直ろうとするが、琥珀はそれを笑って押し止める。

「志貴さま……その、私のつまらないお願いですが、聞いていただけますか？」

琥珀はそう話を切りだし、志貴の表情を見つめる。志貴はきよんとんとして話を聞いていたが、慌てて琥珀に相槌を打つ。

「琥珀さんのお願いだったら何でも聞くよ、言うまでもなく……」

「はあー、でも秋葉様や翡翠ちゃん事だったら志貴さまもすぐに首肯されるかどうかあやしんですけどねー」

そんな事を言い出す琥珀に志貴はあたふたとした様子を見せるが、琥珀はすぐに志貴に向き直って話を続ける。志貴もベッドに上がり、二人ともベッドの上で正座して正対している。

おかしな光景であったが、琥珀にも志貴にもあまりそのことは気にならなかった。

「いや、まあそんなこと無い……とは言い切れないけど、で、琥珀さん、お願いというのほ？」

「はい、志貴さま……」

琥珀は少し恥ずかしそうにはにかむと、そっとその言葉を口に乗せる。

「志貴さま……志貴さまに、私の処女を貰っていただきたくて……その」

琥珀の言葉を聞きながら、志貴はその言葉の意味を察しきれずについ話の腰を折ってしまう。志貴はきよんとんとした顔を隠しきれずに――

「え？琥珀さんの初めての人って……」

その言葉を思わず口にしてしまったことを、瞬時にして志貴は後悔した。琥珀は幼い頃に楨久に犯され、それからずっと四季に犯され続けたという揺るがし難く、

触れたい事実があった。だが、志貴はそのことを気にしないようにしていたのだった。……つい、そのことを思い出していたの失言であった。

志貴ははっと口に手を当てて、暗い顔で己の失言を恥じて顔を琥珀から背ける。志貴はこんな事を言い出すと、琥珀がまた昔日の虚ろな目になるのでは、と恐れを抱いていた。

だが、琥珀は表情に暗さや蔭を見せずに、頷いて話し始める。

「確かに私は志貴さんが初めての人じゃありません……でも、あれは仕方がなかったことだし、志貴さんがご自分を責める必要はありません。だって、志貴さまのお陰で私は助かったんですからねー」

琥珀は目にほんのりと嬉しそうな、だがどこことなく寂しげな色を漂わせていた。志貴がようやく控えめに顔を向けると、琥珀は少し覗き込むような仕草をして話を続ける。

「でも、私の……その、お尻の穴の方は処女なんですすよ、志貴さま……折角ですから、志貴さんにこちらの初めての人になっていただきたくて……ごめんなさい、志貴さま、私が、琥珀が志貴さまに捧げることが出来る純潔は、これしかなくて……」

琥珀の言葉と共に、一粒の涙が知らずに頬にこぼれ落ちる。

志貴には、そんなことを言う琥珀がたまらなく切なく、たまらなく痛々しく、そして愛しかった。こんなことを悲しみを感じる琥珀を壊してしまいたいほどの衝動的な愛が志貴の中を駆り立てる。

志貴は腰を上げ、琥珀を抱きしめた。

骨がきしむほど強く抱きしめられながらも、琥珀は笑ったまま志貴の耳元に囁く。

「志貴さま……貰っていただけますか……」

「……そんな、悲しい事言わないでよ、琥珀さん……俺は琥珀さんが処女でもそう

でなくても全然関係ない……そんなことを言い出す琥珀さんが、あんまりにも……琥珀っ!」

最後の方は、既に志貴も言葉になっていなかった。

志貴は吼えるようにそう言うのと、琥珀を押し倒す。

志貴の腕の下に、体重の下に押し敷かれた琥珀は、息苦しくさえある志貴の硬い抱擁の下でじっと身をゆだねていた。そして、志貴も——嗚咽していることを知った。

「志貴さま……心からのお願いです……どうか……」

「琥珀さん……琥珀さんが大丈夫なら……」

志貴はようやくのこと腕を放し、身体を上げる。腕の下の琥珀は志貴の顔を見上げて笑うと、手のひらを合わせてにっこりと微笑んだ。

そしてその手が志貴の頬に伸び、琥珀は身体を起こして——志貴に口づけする。

琥珀は志貴の首にぶら下がるようにして、感謝の念を込めたかのような接吻をしていた。琥珀の低めの体温の唇と、熱い志貴の唇が合わせられ、舌が絡んでびちりと音を立てる。

琥珀は唇を離すと、目の前の志貴の顔に合わせた

「では、準備を早速致しますので……」

琥珀はそういって、襦袢の襟元を緩めて裸になる。

しばらくしてから、ベッドの上には生まれたままの全裸の姿の琥珀と志貴がいた。志貴がベッドの腕に膝を立てて中腰になり、琥珀はその腰にすがりついてそそり立った。ペニスに舌を這わせている。

琥珀は志貴の袋を揉みながら、血管が浮き出た肉棒の側面を唇で刺激していく。

舌でちろちろと雁首を舐めながら、志貴の顔を悪戯そうな目で見上げる。

「志貴さま、いつもよりかちかちにされていますねー、こんなに嬉しそうな志貴さまのおちんちんを見るのって初めてですよー」

「はっ……うう、琥珀さん……」

「これくらい硬くなれば、大丈夫ですなねー」

琥珀はそういってベッドの上に散らばった、あらかじめ用意していた物の中から、スキンを取り出す。包装を破って取り出すと、琥珀は思いたかのようにくすりと笑う。

「?どうしたの?琥珀さん……」

「いえ、考えてみたら私、スキン使ってえっちするの初めてなんですよー。慣れないのでちょっといたいかも知れませんが、我慢してくださいね?志貴さま」

朗らかにそんなことを口にするのと、琥珀はスキンを口に含んで志貴の隆々とした肉棒の先端に口づけする。そして、そのまま喉まで飲み込むように……

「う……ああ」

「……ん……んう……ん……ふあ、はあ……」

琥珀は唇で志貴の肉棒を絞るようにして、スキンを被せていく。ゴムの輪が志貴の逸物を進んでいき、琥珀の口の中を覆われた肉棒が進んでいった。

やがて琥珀の喉にまで亀頭の先端が辺り、スキンの巻かれた皮膜が無くなると、琥珀は止めていた息を直して顔を離す。

琥珀の目の前の、薄いゴムに包まれたペニス。それを琥珀は興味深そうにしげしげと眺める。そして、おかしそうにちよんちよんと指先でつついていた。

「……こういう風になるんですかー、志貴さま……苦しくありませんか?」

「いや、大丈夫だけど……ん、ありがと、琥珀さん。じゃ、今度はお返し」
「えっ……？」

志貴はそう笑いながら、琥珀の身体を持ち上げて、ベッドの上を下ろす。

志貴の腕の下に再び組み敷かれる格好になった琥珀だが、狼狽えながらも志貴
にお願いをしている。

「志貴さま、その……私もお尻の方は初めてなので、良くほぐしてくださいね」
「うん、分かっている……これ、遣えばいいんでしょう？琥珀さん」

志貴はそういって、ベッドの上に置かれたボトルを持ち上げてみせる。

ローションの入ったボトルと降って志貴は尋ねると、琥珀は恥ずかしそうに頷く。

「じゃあ……ぬるぬるにして上げるよ、琥珀さん」

志貴は歯で見せつけるようにローションのキャップを取ると、とろりと琥珀の
白い肌に透明のローションを垂らしていく。冷たいローションの肌触りに、琥珀は
つい声を上げてしまう。

「ひゃっ……志貴さま……」

「ごめん、冷たかった？でも、すぐに暖かくなるから……」

志貴はたつぷりとローションを琥珀のお腹に垂らし、両手に絡めてすべやかで
無駄のないお腹を、形良く盛り上がった胸を揉み始める。そして、ぬるぬるの手で
琥珀の胸の先端の突起を弄ぶ。

「ひゃう……志貴さま、そこは……」

「琥珀さんも気持ちよくならなきゃダメだよ……ほら立ってきた」

志貴の指は、胸の丘の上で硬さを増していた乳首をくりくりとじり回す。その

為に責められるのが弱い琥珀は、軽い悲鳴のような声を漏らしていた。

「ひゃっ、はあ……や、うあ……」

「さて、そろそろこっちなだね……」

志貴の両手はローションをかき集めるようにしてお腹を下り、そしてたつぷり
とローションをまとわりつかせながら、琥珀の股間に進む。

琥珀の秘部は、たちまちぬめったローションまみれになってしまった。べとべと
とローションにまみれた琥珀の濡れた陰毛の丘を下り、志貴の指は肉と粘膜の壁
の中に分け入った。

「はあっ、ふうあ……やあああっ」

「……こっちもドロドロだね、琥珀さん……琥珀さんの中もきゅうきゅうと俺の指
を締め付けるよ」

志貴はローションの潤滑を利用して、指を一本琥珀の膣の中に滑り込ませてい
た。抵抗無く指を飲み込んだ琥珀の秘部は、奥に進むに連れて志貴の指を肉で噛む
ように包み込んでいる。

「志貴さま……はあああっ」

琥珀は志貴に呼びかけようとしたが、自分の中でぐるりと指を一回転させられ、
悲鳴のような喘ぎ声を上げる。志貴は自分の手の中で快感に身じろぎする、愛しい
琥珀は見つめている。

志貴のもう片方の指が、ローションをまとわりつかせながら琥珀の秘部を下り、
お尻の肉の間を割って入る。

志貴の指は、お尻の中でいやらしげにうごめき、そして——琥珀の窄まった肛門
を見つけた。

そのままローションにぬめった指は、琥珀の肛門に押し入ろうとするが……



「やあ、はあ……」

「……力抜いて、琥珀さん……そうそう……ほら……」

一瞬だけ琥珀のお尻は志貴の指を拒むかのようにきゅつと力が入るが、すぐに志貴の指を受け入れるために緩む。志貴の指はゆるりと琥珀の肛門の中心を押し、そのまま……ゆつくりと琥珀の中に飲まれていった。

いつもは自分の指を入れていた琥珀であったが、それよりも太い志貴の指の感覚に琥珀は、シートを挿んで喘ぐ。

「ふっ……はあ……はあ……」

「琥珀さん、痛くない？」

「だ、大丈夫ですよ……だって、志貴さまにしていたために、毎日こうやって……ふあああつ」

膣と直腸に二本の指を差し込まれた琥珀は、言葉半ばにして中でうごめく感覚で鳴いてしまっていた。志貴は両方の指をまるで虫か何かのように、膣の中と直腸の中をかき混ぜる。

その度、琥珀は指が白くなるほど強くシートを握り、志貴の指が動くたびに背筋を弓なりに反らせていた。志貴は指先が鬱血しそうなほど強い、琥珀の肛門の締め付けを感じながら話しかける。

「へえ……琥珀さん、わざわざ俺のためにそんなことしてくれたのか……」

「はい、志貴さま……」

「じゃあ、たっぷりほぐしてあげないとね」

志貴はそういうと——指をより一層激しく動かす、太いゴムの輪のように締め付ける肛門の肉を揉み始める。

「やああつ……志貴さまあつ、はああ……うっ、ああああー」

背筋を反らせ、突っ張って快感に耐える琥珀の白い身体。志貴は前の方から指を抜いて琥珀の身体に添えると、お尻を突き出すような四つん這いのポーズを取らせる。

膝を曲げ、肛門を晒す格好になった琥珀の肛門を、志貴の指は貪るようにかき混ぜる。

「どう？ だんだん良くなってきた？」

「はい……志貴さま……はあああ……うっ」

志貴は、ぐにぐにと肛門を後ろから弄りながら聞く。指に感じる抵抗は、最初に指先を入れたときの堅い蕾から、大分口を綻ばせてきた。

琥珀はシートに顔をうつぶせ、荒い息で後ろの穴をかき回される感覚に、身体が暴れ出してしまわないように堪えている。

志貴の指がちゅぽん、と音を立てて抜かれると、琥珀の喉から溜息が漏れる。だが、油断したのもつかの間——

「ひあああああ！」

緩んだお尻の穴に、何か硬い物を差し込まれた感覚に、琥珀は思わず叫び声を上げていた。そして、その何かは琥珀の中にどろりどろりと何かをそそぎ込む。

志貴は、再びローションのボトルを手にとり、琥珀のお尻の中にノズル挿入したのであった。そして、中から濡らすためにローションを流腸のように注ぎ入れ、すぐにノズルを外す。

「やふ……はあ……」

慣れない流腸の違和感に琥珀は背筋を震わせる。

志貴は肛門を湿らせる程度にしかローションを流し込まなかつたので、琥珀は

そっと安堵の吐息を漏らした。もし、めいっばいローションを注入されたら、志貴の目の前で粗相してしまったかも知れないのだから。

琥珀の肛門から、透明なローションが——ぷちゅりと零れる。

「じゃあ、琥珀さん……前からがいい？後ろからがいい？」
「前から……お願いします」

志貴は琥珀の言葉を聞くと、体勢を入れ替えて正常位になる。だが、いつも入れている前の膣とは違い、後ろの肛門はいかにも角度が低い。

琥珀はベッドの枕を取って、自らの腰の下に入れる。そして、膝の裏に手を回し、志貴の前で——ローションにまみれた前陰と後肛を晒していた。

「志貴さま……どうか……私の後ろの初めての人になってください……」

琥珀の哀願する声が、志貴の官能を煽り立てる。

志貴は硬く怒張した逸物を二度三度といきり立てるように擦り、腰の角度を変えて先を琥珀の透明なジェルにまみれたアナルに宛う。

琥珀の両足を肩に当てる、腰高の体位で志貴の腰が進む。

「……いくよ、琥珀さん」
「はい……はっ、はああっ、はああぁあぁっ！」

琥珀のアナルは、指よりも太い志貴のペニスを、控えめだが確実に飲み込んでいった。琥珀の足の隙間から挿入の光景を覗く志貴には、自分の肉棒を衝える為目一杯口を開いている琥珀のアナルが目に入っていた。

「うっ……あぁあぁあぁ……うう……」

志貴の肉棒を飲み込んで回りから包み込むような膣の感触とは異なり、後ろの肛門はギリギリのところまで志貴の物を受け入れていた。手荒に扱えば破けてしまいそうなほどの、琥珀の後肛。

琥珀も背中を弓なりに曲げ、その苦痛に耐えている様であった。志貴が顔を見ると、琥珀の額には脂汗が浮かんでいたが……その顔は、志貴の目には不思議なくらい幸福そうに見えた。

こうやって身体を苛まれているのに、琥珀の心はまるで安らぎを得ているかのような——

「……琥珀さん、動いてもいい？」
「はい、志貴さま……私のことは気になされずに、ご存分に……私のお尻の穴を味わってください」

ギチギチと志貴の肉棒を締め付けるアナルの強い締め付けは、志貴には初めての体験であった。腰を動かすのもままならないくらいであったが、潤滑材のお陰で何とか動かすことが出来る。だが、根本まで差し込むと琥珀の苦痛が増すよううで、躊躇われたのであったが……

だが股間に走る官能は、琥珀の身体を——肛門の処女を味わいたがっていた。志貴は、ゆっくりと腰を進め、引く。ゆっくりとした浅い腰のストロークであったが、志貴はこの、締め付けのきついアナルの感覚を味わい始める。

「琥珀さんの後ろ……きつくて……凄く……」
「志貴さま……志貴さま……はあぁあ……うあ……」

志貴の腰は最初は確かめるように、探るように振られていたが琥珀に異状がないのを知ると、だんだんピッチを早めていく。スキン越しであったが、志貴の肉棒は琥珀の体の中の、熱い直腸を感じている。

「ふっ、はっ、ふ……」
「ひゃん……ひゃ……ひゃあああ……」

琥珀の肛門に挿入している——アブノーマルなセックスの背徳感が、志貴の腰の裏の辺りを熱く持ち上げた。睾丸は琥珀のお尻の肉を打ち、いつもより遙かにきつい琥珀の肉が志貴の中の快感を絞り上げる。

「ひい……あああ……志貴さまああ……」

琥珀は自分の肩を抱きしめるようにして、アナルを貫かれる痛みと、それに相反した沸き上がるような直腸の快感を味わい始めていた。それに、志貴の肉棒が直腸の中を突き上げ、肉壁越しに子宮口を突き上げるような形になると、内臓が震えるほどの官能が琥珀の身体を突き上げた。

志貴は慎重ながらも力強く、琥珀のお腹の中をかき回す。こみ上げる射精の欲望を堪え、より長く琥珀の身体を楽しもうとするが——すぐに考えを改める。

志貴は腰を動かし、両手に肩に掛かった琥珀の膝頭を抱えながら言う。

「琥珀……俺は、もう……」

「志貴さま……琥珀の中で、中に出しちゃってくださいっ」

琥珀の声と共にぎゅ、と肛門が志貴の逸物を引きちぎらんがばかりに引き絞り——

志貴はそんな琥珀のアナルを深く突き上げ——

志貴の亀頭は琥珀の直腸の中を動き——

「うっ——」

「やああああ……志貴さまあ！」

志貴は琥珀の中で……放った。

琥珀も真っ白になるようなオルガイスムの中で、身体をこわばらせて嬌声を上げる。

志貴のペニスには、どくんどくと琥珀のお尻の中で射精をする。だが、それはスキンの中に溜まっていった。

腰を振るわせて志貴は上り詰めると、腰を引いて肉棒を琥珀から抜く。

琥珀のアナルは志貴の逸物を吐き出すと、きゅ、と再び元の窄まりを形作り出す。だが、そんな肛門の真ん中にも塞ぎきれない小さな口が中心に開いてしまった。

志貴は琥珀の足を話すと、そのまま琥珀の身体に倒れ込んだ。

いつもなら共感者との交接は射精後にむしろ力が満ちるような感覚があるが、今回の肛門性交は違っていた。切れる息のまま志貴は琥珀の上に被さっていたが、顔を動かして琥珀の顔を見ると……

琥珀は顔に掌を当てて、泣いて……いた。

「琥珀さん……御免、痛かったの？」

「いえ、そうじゃないんです志貴さま……志貴さまにしていただけで、うれしくって……」

志貴は琥珀の手からこぼれ落ち、目尻を伝う涙を見た。

その涙を震える手を伸ばして拭うと、琥珀の手をそっと外して涙に濡れる頬に唇を寄せる。

「しき、さま……」

「泣かないでよ、琥珀さん……ありがと、こんな俺のために辛い目を我慢して……」

志貴は囁きながら顔を動かし、琥珀の顔に唇を降らせ続ける。そして、志貴も琥珀も目を閉じて、唇を台わせてキスをする。

志貴が琥珀に覆い被さった恰好で、二人はお互いの身体の温かさを、唇の柔らかさを、嬉し涙の味を——味わっていた。

「琥珀さん……」

志貴はそう小さく言い、顔を起こす。そして身体を起こしてベッドに座り込むような姿勢になると、もどかしげに股間にぶら下がった逸物から、スキンを抜き取る。

——これじゃあ、琥珀さんは哀しすぎる

志貴は、自分の肉棒と目の前の琥珀の身体を見つめて、心中で独白する。

——琥珀さんにも、あげないと

自分の放った精液に濡れる志貴のペニスであったが、まだ堅さを残していた。琥珀は身体を起こして、志貴と自分の身体をティッシュで拭こうかと思っただけ……志貴の動きは、まだ二人の性交の終わりを示すものではなかった。

琥珀は、自分の前の秘部に志貴の濡れた性器が当たるのがわかった。前の女陰もローションでぬるぬるになっていたし、肛門性交の間ににじみ出た愛液で潤っていたのであったが——

「ああんっ！」

ずるり、と志貴の肉棒が思いも掛けずに中を、生で貫かれて琥珀は驚きの声を上げる。

琥珀の中に挿入した志貴は、腰に手を当てて琥珀を抱き上げ、ベッドの上で向かい合う座位の姿勢になった。そして、下から力強く琥珀を突きながら志貴は言う。

「琥珀さん……折角琥珀さんが暮れたんだから、俺も琥珀さんにあげるよ」

「あっ、あっ、あっ……志貴さま……」

「琥珀さん……琥珀さんの子宮の中に、俺の精液をたっぷり注いで上げる。そして——」

志貴は琥珀の背中に手を回し、リズムよく突き上げながら話し続ける。

「琥珀さん……俺の子供を産んで、欲しい」

志貴にそう言われた瞬間——こはくは信じられないような喜びと驚きに満ちた顔で、両手で口元を被って志貴を見つめる。今こうやって、志貴に挿入していることも一瞬忘れてしまったかのようだった。

自分がそう言った瞬間に、志貴は琥珀の膣の中が包み込んで吸い取るようにうごめくのがわかった。それは先ほどのアナルの感覚より鋭くは無かったが、快感と言う意味では比べ物にならないものであった。まるで精液を吸い取るような琥珀の中の動きによって、志貴は二度目の射精を迎える。

琥珀の中の子宮口に白濁した精液をそそぎ込みながらも……志貴は抜くことなく腰をグライントさせ続けた。琥珀は自分の中で志貴の爆発を感じながらも、志貴に切々と泣きそうな声で志貴に告げる。

「そんな……志貴さまも存じですよね？」

私は子供の頃から何度も何度も乱暴されて……もう赤ちゃんを産めない身体なのに……」

「そんなことはない！」

志貴は叫び声だけで世界を揺り動かすかのような気迫で叫ぶ。

窓硝子が志貴の腹の底からの叫びで震えた。琥珀は、突き上げる志貴の肉棒以上に、お腹の底から持ち上がるような叫びに身体を振るわせ、延ばしていった。

「志貴さま……どうしてそんなことを仰るんですかー？」

「琥珀さん……悲しいことを言わないでよ。」

俺にはわかるんだ……昔の事なんか知らない。俺は琥珀さんがきつと俺の子供を産んでくれると分かるんだ、それに、琥珀さんと赤ちゃんといっしょに幸せに暮

らせるって……そんな幸せしか、俺は琥珀、君に上げられないんだ！」

志貴は血の出るような声で叫びながら、琥珀を貫き続けた。

「琥珀さん……琥珀さんは、そんな幸せは……駄目なのかい？」

「しき……さま……う……嬉しい……」

琥珀は身体を志貴に預け、ぎゅっと抱きしめた。

志貴の身体は激しく動き続け、琥珀の細い身体を腕にしなから——三度の絶頂に上り詰めようとしていた。

《了》

琥珀の方は、志貴の声を聞いてから何度達したか分からなかった。

身体の快感よりも、志貴の声の方が琥珀を突き動かしていた。二人の体温は融けてしまいそうほど熱く、汗を流しながらもより強く突き、より強く締め付ける。

「志貴さま……琥珀に、琥珀に沢山ください……」

「琥珀う……ああああっ！」

志貴は琥珀の中で、今までより強く、まるで己の魂を吹き出すかのような射精をする。

体の中で、琥珀はびゅくり、びゅくりと精液が吹き上げるのを感じていた。そしてその間も腕をぎゅぐゅと志貴に巻き付け、この身体を決して離すまいと感じながら——

「……琥珀さん……」

「志貴さま……」

射精が終わり、二人とも絶頂に達したまま——二人は抱きしめ合って動かなかった。

琥珀の中で精液が広がり、志貴の体の中には共感の力が潮のように広がっていく。

「……琥珀さん……出来るよ、きつと、これで俺達の子供が」

「はい、志貴さま……かならず……」

志貴と琥珀は抱き合ったまま、そう呟き合う。

愛する二人はそのまま——お互いの身体を離れたくなかった。あたかも天涯孤独の身であり、纏るのが相手の身体の体温だけしか無いかのよう。

——さて、幸福な三人の親子のお話は、またいずれかの機会に

